

〔西遊雜記四〕薩州の武風を見るに、鎌倉の遺風有りてあしからず、東都へ兩度も參勤して、上方筋の風俗を見し士は、中國筋の士風とさして替りし事はあらざれ共、外城に在宅して、薩州の地を離れざる士は、其容體土佐繪に寫せし士のごとく、長き刀にはぎも見えるやふ成短き袴、言語も國なまりにて解しがたく、いかにも古しへのぶしのかゝる風俗ならんと、頼母敷體也、秀吉公にこそ手も無く責破られし事なれ、何國の戰ひにても、薩州軍はねばり強くして、きたなき負をせず、土著の制尤其ことはり有べし、百二十餘外城にて、士拾三万餘、五石取十石取も土著して、自ら耕して作り取にする時には、馬も養はれ、三人も五人は自由に暮され、身體も大丈夫と成て、寒暑も龜食もいとはぬやうに成物なり、上方筋の武風は是に反して、平生の身持十人に七八人迄甘を食し、厚く著し、榮耀に暮し、至て寒く至て暑き節などは、いかゞあらんと頼母しからぬ風俗あり、薩州は海内西南のはしにて、地面理堅固にて、要害いはんかたなし、島津家數代地をかへず、其ことわりなきにあらず、勝地を給ふといふべし、然ども邊鄙なるゆへに、婦人の風俗はいとゞあしく、言語は聲高にて、尻張の吟の強き音故に、甚だ解がたし、中以下に於ては、一笑せる言葉多し、中にも脇をトウゾクと稱せる事にて、腰の物脇指など、いふては、土人は一向に知らぬ名也、是等の事を以僻地なるを知るべし。

〔西遊記二〕獵犬

薩摩は武國にて、若き人々山野に出て、鳥獸を獵る事、他國よりも多し、すべて山野に獵するには、よき犬を得ざれば不叶事なり、彼邊の犬常の人家に養ひ飼ふものは長ケ低く、上方の犬よりも少し小なり、常に座敷の上に養ふて、上方の猫を飼ふが如し、至極行儀よく、上方の犬よりは柔和なり、異品といふべし。○下略

〔西遊記續編一〕古朴